

# 明日への架け橋 若手技術者!

インフラ維持・整備に取り組む地方公共団体や建設会社の若手技術者にインタビュー。現場からの生の声を、建設関係者やこれから建設業を目指す若者に向けてお届けします。

Vol.5

株式会社市原組

山倉崇さん・塚田悠也さん

Takashi Yamakura  
Yuya Tsukada

働きやすさが仕事のモチベーションにつながる

分業化やDX化で生産性向上



● PROFILE ●

やまくらたかし  
山倉崇 (左)

1998年生まれ。千葉県出身。大学時からのインターンを経て、2020年に市原組に入社。現在の楽しみは会社の同僚と飲みに行くこと。

つかだゆうや  
塚田悠也 (右)

1992年生まれ。新潟県出身。地元・新潟の建設会社を経て、2017年に市原組に入社。現在の楽しみは休日にお子さんとかけること。

今回紹介するのは、株式会社市原組に所属する山倉崇さんと塚田悠也さん。

市原組は、千葉県トップクラスの地場ゼネコンとして道路の維持補修、上下水道、橋梁の耐震工事などさまざまな公共工事に携わっています。一方で、1人が休んでも複数担当制により現場が進捗するような環境を整備。社内のDX化にも早くから取り組み、令和4年度の現場監督の年間休日は136日とワークライフバランスの実現に先進的に取り組んでいます。

過酷な労働環境のイメージから敬遠されることも多い建設業界ですが、山倉さんと塚田さんのお話から感じられるのは「明るさ」。仕事には真摯に取り組みながらも、現場を楽しみ、そして私生活も大切にしている二人の姿には、若い世代を建設業に呼び込むヒントが詰まっています。

**予想以上にやることが多い  
「現場代理人」という仕事**

—— 建設業界を志望した経緯と、今の会社を選んだ理由を教えてください。

山倉：私は大学で土木を学んでいましたが、当初は土木関係の仕事強く希望していたわけではありませんでした。しかし、当社で実際にインターンを経験してみても、建設現場の仕事に面白さを感じました。例えば、ただ掘ってコンクリートを打ち込んでいればいい、ということじゃなく、重機を動かすことひとつをとっても細かいところを意識しているんな工夫がされているところや、現場監督という仕事は、お金や工程、人の管理を任せてもらえるので一種の社長みたいな感じのところも面白いなど。インターン終了後にはアルバイトを経て、正式に入社しました。

—— お二人はこれまでにどのような現場を経験されましたか。

山倉：これまでに橋脚の現場を3カ所経験し、現在は道路下の水道管の入れ替え工事を担当しています。今回の現場では、初めて現場代理人を務めています。  
塚田：前職も含めて、道路、橋梁、河川、公園整備などさまざまな現場に携わってきました。現在は宿泊施設の解体工事を担当しています。2020年から現場代理人、2022年からは監理技術者も兼務して現場を運営する立場になっています。

—— 現場での1日のスケジュールを教えてください。

山倉：8時から朝礼を行い、現場が道路の上のため9時頃から交通規制用の資機材を設置し、9時30分頃から本格的な作業が始まります。日によって現場作業と内業を使い分けていますが、16時30分頃には規制の資機材を片付け、通常18時までには帰宅しています。

—— 山倉さんは今回初めて現場代理人を担当されていますが、お二人は「現場代理人」という仕事をどのように捉えていますか。

山倉：予想以上に管理すべき事項が多いという印象です。さまざまなことを管理する面白さを感じる一方で、全てを自分で判断しなければならない責任の重さも実感しています。

塚田：現場代理人の役割は多岐にわたります。安全面はもちろん、工程、品質、出来形の管理、作業員の調整など現場内での管理に加え、近隣住民や役所への対応、予算管理など、現場外でも配慮すべき点が多くあります。現場代理人は「会社代表の代理」という立場であり、就任前後で責任の重さが大きく変わります。当社では入社2年目くらいから現場代理人を任せていますが、最初は1人では対応できないため、経験豊富な監理技術者がサポートする体制を整えています。

**水道管の取り替えは  
周辺住民からの関心が高い工事**

—— 山倉さんが現在担当されている水道管の更新工事について教えてください。

山倉：65年ほど前に敷設された水道管を取り替え、耐震化する工事を行っています。交通量の多い道路の下にある水道管を交換するため、交通量が少ない夜間に工事を行うこともあります。夜間作業は暗くて事故が起りやすいため、安全面には特に気を遣っています。また、大型の重機を使用するため、周囲への騒音や振動にも配慮しています。

—— 水道工事特有の難しさというのがありますか。

塚田：「掘ってみないと何が出てくるか分からない」というのは、埋設管工事に共通する難しさです。特に、



山倉さんが現在担当している現場（一拡園生～登戸線（その3）配水本管布設替工事）。2車線で交通量も多く、安全への配慮が欠かせない。

水道工事では予想外の埋設物の有無を確認する「試掘」の作業が重要になります。

**山倉**…今回の現場では、直径70mという大口径の水道管を敷設しています。このような大口径の管は基本的にメーカー在庫がなく、受注生産品を使用します。材料手配に時間がかかるため、想定外の埋設物が工事開始後に見つかると、敷設する水道管の形状が変わってしまう、工事がストップしてしまいます。こうした事態を避け、現場をスムーズに進めるためにも、試掘は念入りに行っています。試掘は発注者の依頼に則って行いますが、気になるところがあれば追加でも確認しています。

——現場代理人として一番大変な仕事は何ですか。

**山倉**…やはり住民対応です。特に夜間工事に対しては近隣の住民の方からご意見をいただくこともあるため、夜間工事を予定していても状況によっては昼間の工事に変更することもあります。ただ、水道工事は他の工事と比べると住民の皆さんも好意的に受け止めてくださることが多いです。また、2024年1月の能登半島地震の影響もあり、自宅近くの水道管がいつ交換されるのかを気にされている方も多いためです。

**塚田**…他の現場でも、住民の方から何の工事をしていいのか尋ねられて「水道管を入れ替えているんです」と答えると、「そうなんです」 「ご苦労様です」と労っていただくことがあります。地震の際に水道が止まると生活に大きな影響があるので、住民の皆さんの関心の高さを感じます。また、水道関連の工事は書類を電子納品ではなく直接持っていく場合もあり、手間を感じることもありますが、今後はDX化が進んでいくと思います。



古くなった水道管を取り替える工事。重機の稼働により騒音や振動が発生するため、周辺住民への細やかな対応も求められる。

——工事の難易度や周辺への影響など、大変な場面も多いと思いますが、現場はとても良い雰囲気、和気あいあいと仕事をされているのが印象的でした。

**山倉**…協力業者の皆さんの協力がなければ、現場は成り立ちません。私たちは現場監督という立場ですが、職人さんたちは経験豊富なベテランの方も多く、上から目線で話をするのではなく、忙しくても職人さんや協力業者の皆さんと雑談するなど、コミュニケーションを取ることを大事にしています。



思わぬ埋設物が出てくることもある水道管の取り替え工事。想定外の埋設物が出てきた場合には工事がストップしてしまうため、試掘は念入りに行われる。

——お二人は現場代理人や監理技術者という立場で、日々決断を迫られる場面も多いと思います。そうした時に、自分の中で軸とされていることはありますか。

**塚田**…土木の世界ではよく「経験工学」と言いますが、やはり自分自身の経験値が一番大事です。過去の経験から「こういう場合はこうしたらいい」というのが分かるので、それを元に意思決定をしています。また、当社にはベテランの先輩方が多くいるので、迷ったときにはその方たちの知恵も借りています。

**山倉**…私は経験がまだまだ足りないので、現場で頻繁に先輩へ電話で相談しています。それでも自分で判断しなければいけない場合は、とにかく安全を第一に考えます。

## 「聞くは一瞬の恥、聞かぬは一生の恥」 「段取り8分」の教訓

——今までのキャリアで学んだ教訓を教えてください。

塚田：「疑問点を残さない」というのは、仕事をする上でとても重要です。新入社員の場合は何も分からない状態で、分からないまま間違ったことをして失敗してしまふこともありました。その時上司に言われたのは、「聞くは一瞬の恥、聞かぬは一生の恥」ということです。今は現場を管理する立場ですが、分からないことは自分なりに調べたり、誰かに聞いたりして、分からないままにしないように心掛けていますし、後輩にも強調して伝えています。

山倉：私が1年目のときに塚田さんに教えてもらったのは、「段取り8分」です。何でも段取り、つまり入念な準備をしておけば、大きな失敗はないということです。入社当時はよく分からなかったのですが、現場代理人になり、工程や材料、人員や予算などを日々管理するなかで、その言葉の重要性が理解できるようになりました。

## 「休める」からモチベーションも向上 過渡期にある建設業界

——御社では「休める現場監督」というキーワードを掲げ、令和4年度には現場監督の年間休日136日を達成するなど、労働環境の向上にも積極的に取り組まれていますね。

塚田：当社では、「分業」や「交代で休む」という考えが浸透しています。例えば、「現場に行くなら、内業はこっちでやるよ」というように上司がうまく業務

を分担してくれます。また、現在土曜日は基本的に休みの現場が多いですが、土曜日に現場が稼働する場合も交代で休みます。こうした企業風土は、当社に入社して一番驚いた点です。

——プライベートの時間を取れるというのは、仕事に対するモチベーションにも良い影響がありますか。

塚田：休日出勤も残業もなるべくしないように、集中して仕事することを心掛けています。仕事するときはしっかり仕事をして、休みの日は家族と出かけて…という感じでメリハリをつけています。また、こうした職場環境なので、自己啓発のための資格取得の時間も作りやすいです。

山倉：休みがきちんとあると疲れが取れますし、また次の週からリスタートできます。現場での分業ができていることと同時に、きちんと休みが取れるというのは仕事がかどる一因にもなっていると思います。

——お二人は現在の建設業界をどのように考えていらっしゃいますか。

塚田：建設業界は「3K(きつい・汚い・危険)」の代名詞のように言われてきましたが、土曜休みの現場も増えていてプライベートの時間も取りやすくなっています。特に当社は、ワークライフバランスを強く進めているので、国土交通省が掲げる「新3K(給与・休暇・希望)」に近づいてきていると思います。

山倉：今はICT施工の現場も出てきていますし、公共工事での発注者とのやり取りや工事書類の作成などをWEBで行える「情報共有システム(ASP)」の活用も始まっています。当社でも塚田さんが中心になって社内のICT化を進めています。自分で調べて業務をどんどん効率化することもできるので、興味を持ってもらえるといいなと思います。

塚田：ICT施工の現場では、業務を大幅に効率化で

きています。人手不足の問題もありますし、ICTによる業務効率化や生産性の向上は今後ますます重要になると思います。

——若手技術者や、今後業界を目指す学生へアドバイスをお願いします。

塚田：建設業界というのは簡単な仕事ではありません。ただ、大変な現場ほど終わったときの達成感も非常に大きく感じられます。労働環境や現場での働き方も含めて、業界を取り巻く状況は大きく変わってきています。あまりネガティブなイメージにとらわれず、ものづくりを通して一緒に業界を盛り上げてもらえればと思います。

(取材日：2024年6月)

### ● 取材後記 ●



塚田さん、山倉さんが声を揃えていたのが「会社の雰囲気が良い」ということ。仕事に対する個人の努力はもちろん欠かせないものですが、仕事とプライベートを両立できる職場環境を実現することが、社員のモチベーション向上にもつながることを強く感じました。お二人のお話からは、建設業界の新しい姿が垣間見えます。